

論 文 の 要 旨

申請者氏名： 二・ワヤン・プリリヤシンタ

論文題目：
インドネシア人日本語学習者の動機づけの変化とその要因—縦断
的な調査から—

インドネシアのテレビ番組では、「ドラえもん」や「しんちゃん」などの日本のアニメが毎週放送され、多くのインドネシア人は子供の時から日本文化に触れている。インドネシア人にとって日本は遠い国ではないという印象もある。さらに、第一外国語である英語を除けば、どの教育段階でも日本語の人気は依然として高い。その背景には、日本との経済関係の強さから将来日本に関係する職に就くことを目的としていたり、日本のポップカルチャーへの関心が高かったりという現状がある（国際交流基金、2014）。しかし、インドネシア人日本語学習者数が多いにも拘らず、インドネシアの日本語教育に従事する教師の日本語能力の低さや日本語母語話者の教員数の少なさなど、様々な問題がある。そこで、このような学習状況の中でインドネシア人日本語学習者の日本語学習動機づけの状況、特に動機づけの変化とその要因について明らかにすることは意義のあることであり、本研究の目的とすることとした。

外国語学習における学習者の動機づけが注目され始めて半世紀になるが、これまで多くの動機づけ研究がなされてきた。しかし、学習環境、調査の対象者の状況などが異なり、一致した結果とはなっていない。また、学習者の動機づけは安定せず、学習の動機づけは常に変わるものであるという指摘がある（Muir & Dörnyei, 2013）。しかし、一回のアンケートやインタビュー調査だけでは、動機づけの変化を明らかにすることは難しい。さらに、教育の現場では常に変化する学習者の動機づけを維持するために何が必要なのかというところに関心が集まる。学習者の動機づけを高める要因を扱った研究もされ始めた。本研究では、先行研究でまだ明らかになっていない点を踏まえ、インドネシア人日本語学習者の動機づけの変化と動機づけの変化をもたらす要因を中心に2回の調査を行った。具体的には以下の課題を明らかにする。

研究課題1（1回目の調査）

A) 1学期での動機づけの変化を明らかにする。

1回目の調査では、インドネシアの大学で日本語を専攻しているインドネシア人日本語学習者の動機づけが1学期でどのように変化しているのかをアンケート調査を実施し、数量的に明らかにする。

B) 動機づけの変化をもたらした要因を明らかにする。

1学期の間で動機づけが上昇する時や低下する時がある場合、それぞれどのような要因が影響したのか、その要因を学習日記調査より明らかにする。

研究課題2（2回目の調査）

動機づけの変化の要因の報告を受けた日本語教員が指導したクラスの学習者の動機づけが1学期でどのように変化するかを明らかにする。

2回目の調査では、まず、1回目の本調査の結果をインドネシアのA大学の日本語教師に報告した。教師が、1回目の本調査の結果で得られた動機づけを促進した要因を考慮しながら教えた場合、学習者の動機づけはどのように変化するかを調べるため、1回目の調査と同じアンケート調査を学期始めと学期終わりの2回実施する。

動機づけの変化を調べるために、アンケート調査を行い、アンケートの項目を決める前に、動機づけのそれぞれの種類（「内発的動機づけ」「外発的動機づけ」「理想の自己を目指す動機づけ」「義務の自己による動機づけ」）について操作的定義(Operational Definition)を行った。アンケート調査は、学習者の動機づけの変化を調べるために、学期始めと学期終わりに2回行った。一方、学習日記は、学習者が日々の日本語学習において、動機づけがなぜ上昇したのか、なぜ低下したのかなど、学習者の動機づけの変化要因をインドネシア語で記述してもらった。アンケートのデータを無料統計ソフト(JASP0.10)にかけた。学習日記のデータは Nvivo 12 Plus という質的調査用のソフトで分析した。

1 回目の調査のアンケート調査の対象者は、インドネシアのバリにある A 大学（国立大学）と B 大学（私立大学）で日本語を専攻している1年生から4年生までの学生である。A 大学の場合、1年生は38名、2年生は30名、3年生は32名、4年生は12名の合計112名から回答を得た。B 大学の場合、1年生は33名、2年生は31名、3年生は31名、4年生は31名の合計123名から回答を得た。一方、学習日記調査に協力してくれた学生は30名（1年生から3年生、それぞれの学年で10人ずつ）であり、全員 A 大学の学生である。4年生は卒業論文しかなく、また日本語の授業もなく、あまり大学に来ていないため、学習日記調査の対象からは外した。2 回目の調査のアンケート調査の対象者は、A 大学で日本語を専攻している1年生から4年生までの学生である。1年生は58名、2年生は45名、3年生は30名、4年生は17名の合計150名である。1 回目の調査のアンケート調査は、2017 年 9 月（学期始め）と 2018 年 2 月下旬から 3 月上旬（学期終わり）までの間に実施した。学習日記調査は、2017 年 9 月から 2017 年 12 月までの間に実施した。2 回目のアンケート調査は、2018 年 9 月（学期始め）と 2018 年 11 月（学期終わり）に実施した。

調査結果、「インドネシアの大学で日本語を専攻しているインドネシア人日本語学習者の動機づけが1学期でどのように変化しているのか」の研究課題に関しては、A 大学の全学年の学習者と B 大学の全学年の学習者の動機づけは1学期間の日本語学習において動機づけが低下していたことが分かった。しかし、1年生から4年生までの学年ごとの動機づけの変化は A 大学と B 大学の結果が異なり、A 大学の場合、2年生と4年生が統計的に有意と言える低下があり、3年生の動機づけには統計的に低下の有意傾向があることが分かった。一方、B 大学の場合、1年生の動機づけが統計的に有意と言える低下があったが、2年生の場合、統計的に低下の有意傾向があることが分かった。さらに、動機づけの種類の変化を見ると、A 大学も B 大学も全学年全体の学習者の動機づけの種類の中、「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」に変化が見られ、低下したが、「理想の自己を目指す動機づけ」に関しては、A 大学の学習者は低下したが、B 大学の学習者は維持でき、「義務の自己による動機づけ」に関しては、A 大学の場合低下の有意傾向にあったが、B 大学の場合は維持できていたことが分かった。

次に、「1 学期の間で動機づけが上昇する時や低下する時がある場合、それぞれどのような要因が影響したのか」の研究課題に関しては、学習者の動機づけが様々な要因によって影響されていたことが分かった。その中で1年生から3年生までどの学年にも最も多く記述された要因が6つあり、それらは「教師の教え方(Teaching method)」、「成功に関する自己定義・判断(Personal definition and judgement of success)」、「失敗に関する自己定義・判断(Personal definition and judgement of failure)」、「宿題(Homework)」、「自律学習(Autonomy (self-directedness))」、「課外活動(Extracurricular)」であった。

最後に、「教師が、1 回目の本調査の結果で得られた動機づけを促進した要因を考慮しながら教えた場合、学習者の動機づけはどのように変化するのか」の研究課題に関しては、4 学年全体で見ると学習者の動機づけが統計的に有意に低下するという結果が出た。しかし、学年別に詳しく見ると2年生と3年生の動機づけの変化には統計的な有意差がなく、1 学期間動機づけが維持できていたが、1 年生と4年生に関しては動機づけが統計的に有意に低下していたことが分かった。(2,965 字)

備考: 1. 和文で作成する場合は、2,000 字～3,000 字、英文で作成する場合は、700 語～1,000 語程度で作成すること。

2. 用紙の大きさは、日本工業規格A4型とすること。